

記友喪

きょうび、もない年に生まれてしま
 であるより ったことを。ろくでもな
 は、でないほ い年に生まれたものは、
 うがよっぽど かっこをつけてもしょ
 むずかしい。 うがないことを知って
 船戸与一はでない男だっ た。かれは、これみよがし
 た。ある日、ボンツと言 ではなくった。ことさら
 った。「ぼくは善悪でも に「正義」をかたりはしな
 のをかんがえないし、二 かった。はったりがなか
 ッボン賛歌をう った。知るかぎ

たう余地がな
 い。その気もな
 い」。死ぬまで
 それをとおし
 た。正史と燦爛
 たる光にはかん
 しんをしめさな
 かった。外史と
 影と惨憺たる敗

船戸与一さんを悼む

完全無虚飾人

庸 見 刃
 世でもっともわ
 ざとらしくない
 ひとだった。わ
 ざとらしさには
 堪えられなかつ
 たのだらう。わ
 ざとらしくすま
 いといつ、わざ

者に、ことのほか敏感だ とらしささえなかった。
 った。いっしょに酒をの おそらくかれは、ひとと
 んでいるとずいぶん楽だ いう恥の根莖に感づいて
 った。しゃべらなくてす いた。船戸与一は身まか
 むから。黙ってじっくり った。時宜にかなって
 とのめた。おたがいに敗 るのかもしれぬ。わたし
 戦直前の一九四四年生ま はこれみよがしの、ただ
 れであることを、話しは わざとらしいだけの夜に
 しなかつたが、たしょう 通りのこされた。(へん
 意識はしていた。ろくで み・よう川作家)